

運動及び体育の価値に迫る考察

～ 幼児体育・学校体育をとおして ～

本多辰之

The study a value of exercise and physical education

～In the Infant physical education

and the School physical education～

by

Tatsuyuki HONDA

【キーワード】 こども、運動遊び、幼児体育、学校体育

【要旨】

本論は、体育という立場から幼児体育・学校体育の研究に係る過去からの動向を探りながら理論的にはどのようにあるべきか、また、いかに活動すべきかで整理することを念頭にまとめることとした。そこで、まず体育の意義を考察するとともに体育関係の専門誌や学会及び専門大学等における紀要においてその動向を調べた。このことによって、幼児期における体力や運動能力においては多面的な研究がなされており、現代社会における子どもの体力低下問題への対応が伺える。しかしながら、その実態を検証する上で体力診断や運動能力の測定について、子どもの発達段階を踏まえた内容・方法であるのか。また、その後の支援や激励がなされているのか懸念するところでもある。つまり、体育科学習を振り返ってみると、「できない」子どもを生み出すとともに「できないから、おこなわない。」「おこなわないから、できない。」その結果として体力の低下に繋がり、現在に至っているのではないかと危惧しているところである。体力や運動能力の評価や運動技術の向上をめざすのは重要なことであるが、子ども一人ひとりの発達特性を把握しながら、個別化・個性化に視点をあてた体育研究をめざしたいと考える。

受理日：平成 24 年 11 月 30 日

純真短期大学こども学科 講師

はじめに

体力低下は1960年頃から叫ばれ現在に至っている。具体的には柔軟性や敏捷性をはじめ、こと、背筋力等においては1964年の調査開始以降低下の一途をたどっており、自体重を支えるべく背筋力指数「2」（自己の体重の2倍）や他者を抱え起こすことができる背筋力指数「2.5」を下回っている。これは、今後の高齢化社会を迎える我が国においては重要且つ深刻な健康課題である。さらに、文部科学省が実施している新体力テスト調査報告によると「子どもの体力・運動能力」は1980年以降低下傾向を示しており、大きな社会問題として追い討ちをかけているようでもある。その原因等は多様化しており、焦点化できないものではあるが、一般的には現代の子どもたちが置かれている社会環境からという見方をおこなうのが妥当であろうと考えられている。佐藤晴雄⁽¹⁾は現代教育概論において「子どもの遊びが変化し、ゲーム機を使用した室内遊びが多くなったことで、現代の子どもたちは体が大きい割にはひ弱なつた。その結果、様々な疾病や身体異常が増えつつあると指摘される。」と、述べている。また、塩田桃子⁽²⁾は日本における幼児体育研究の動向と課題において「遊び場や遊び時間の減少、人間関係の希薄化に伴う遊び仲間の減少・・・」を訴えている。これらのことは、昔との比較論ではあるが、子どもの生活の中に息づいていた運動体験が少なくなったことを意味しており、結果として身体異常の増加や遅しさ・しなやかさが乏しくなっている昨今の様子を示している。

しかしながら、それら社会的要因は国家的規模の問題であり、大きくは時代の流れとして受け入れるべき課題であるのかも知れない。であるならば、身近な環境であるところの我々大人や教育者が広い視点から子ども一人ひとりに働きかけなければ、今後も長期的に続く問題であろうと思われる。

筆者は現在まで、小学校において教科体育及び教科外体育としての学校体育を、また、中学校における教科体育を、そして短期大学にて幼児体育に触れるとともに、居住地域における社会体育に三十数年携わってきた。しかし、上述した現代の教育課題と筆者の実践経験をすり合わせた時、児童生徒や学生、さらには関わった教員及び地域の人々に対し、その背景にある運動の必要性やあり方という着眼から、どれほど触れさせることができたか、恐縮しているところである。そこで、幼児体育にかかわっている現在を見つめながら、過去に実践してきた小学校・中学校における体育科学習を振り返るとともに、保育士や教員をめざす短大生に対して、幼児体育・学校体育さらには社会体育への系統性を重視した運動と体育を提供していきたい。

本稿は、幼児体育及び学校体育における理論研究の動向を探りながら、その概念やあり方を明確化するために、体育関係の学会や大学等の専門誌、紀要等における先行研究や報告等を基盤にして「幼児体育・学校体育における運動と体育という学びの中から、体力低下という今日的課題」に迫るものである。

1. 運動と体育

(1) 運動の定義

運動という言葉を用いる場合は、一般的に身体運動を示すことが多い。鳥居鎮夫(3)は、運動について次のように述べている。その形態からみると筋（筋肉）の収縮による関節運動であるが、運動の原動力となるのは筋である。一方、生理学的にみた場合には、筋の収縮はその支配神経に依存している。さらに、動きを一定の目的にかなった運動になるように統御しているのも神経系の役割と言われている。その運動を筋収縮としてみると、収縮によって筋の出しうる力（筋力）、敏捷（びんしょう）性、および持久性が問題となる。筋力は、筋を構成している個々の筋線維の収縮によって発生する張力の総和であるから、筋の断面積の大きさに比例する。敏捷性は筋収縮の速度に依存するが、共同筋（たとえば関節を屈曲させる筋）の収縮速度と拮抗（きっこう）筋（共同筋に対抗して伸展させる筋）の弛緩（しかん）時期などが複雑に影響する。また、持久性は、筋肉内の収縮に要する物質の量と血液の循環によるガス交換と物質代謝に関係している。これらの運動における筋力、敏捷性、および持久性は、いずれも、意欲とか動機づけ（モチベーション）とよばれる大脳皮質の働きに負うところが大きいとされているが、訓練によって、その能力を向上させることができるという。

つまり、運動とは、意識のあるなしに関わらず、体を動かすことによって身体機能を高めることと言える。

(2) 体育の定義

佐藤 裕(4)は、体育とは「身体の教育」と定義している。具体的には、教育機関である学校における児童・生徒の心理的、精神的、社会的に健康な身体をつくる教育のことである。伝統的には学校における体育（教科としての体育科及び保健体育科授業）を示している。しかしながら、学校生活においては教科外活動もあり、広義にはこれらのスポーツ活動における教育も含まれている。こうしたものを総称して「学校体育」と呼んでいる。学校体育は、身体運動が人間形成に及ぼす影響をさまざまな現象から多角的にとらえ、運動や遊びそのものを提供するとともに、それらを意図的・計画的に教材化することで、人としての知覚や運動行動能力、さらには文化認識を深めながら、運動することの意味や健康とは何かを理解させていく教育を意味している。

2. 幼児体育

(1) 幼児体育の定義

幼児体育を述べる前提として「幼児」という言葉の概念を規定しておきたい。幼児体育に用いられる幼児は3歳児から就学するまでの幼児期（後期）児童を対象として

いる。この時期は意図的な教育が可能な時期という判断からであり、その発達特性が際立っている。個人差はあるとしても、5歳児になると身長は出生当時の2倍に増えるとともに、体重においては5倍にも増加するとされている。意図的な教育が可能な時期とする説には多少の疑問はあるとしても、身体面での成長やその機能面での伸び（特に神経系、調整力）に関しては3歳から4歳までが急速な上昇を示すとされている。そこに、子どもへの体育をという価値と必要性が生まれてきたといえる。では、なぜ幼児体育であるのかについて探ってみた。そこには、次のような経緯がある。幼児の身体運動を遊びの中に組み入れることで「体育遊び」として位置づけされていたことに対して「幼児の身体的活動における理論と方法を明確にするとともに、意図的な身体教育を含む幼児体育を確立すべきである。」という富田玲子⁽⁵⁾は体育遊びから幼児体育への転換を図った。教育の根底にある意図的・計画的という理論がそうさせたのであろうと思われるが、この幼児体育という言葉の定義付けはいくつかある。

畠山トミ⁽⁶⁾は、その著書「からだと遊び」の中で「幼児体育とは、幼児期の特性を踏まえた身体活動を通して、人間形成の基盤をつくる教育のいとなみである。」と述べ、人間形成の方法としている。

多くは体育を「運動をとおしての人間形成の営みである。」という考え方から、手段論としての定義付けがなされているようである。しかしながら、「体育は運動を手段とするのではなく、運動文化の追求を自己目的とする教育である。」と定義付けするところもある。

結果としては、教育すべき内容であり意図的・計画的なカリキュラムをもとに明確な目標を掲げて取り組むべきであろうと考える。

(2) 幼児体育のねらい

幼児体育は、幼児期の子どもに体を使って遊ぶことの楽しさを味わわせるとともに心身ともに健康な成長をめざしていくものである。

現在の社会生活に目を移すと、子どもが体を使って遊ぶ場所や時間等が限られており、安全対策（危機管理面）面等を加味すれば、幼児期の子どもだけを外で遊ばせることは困難な現状にある。家庭教育では保護者が意識的に（子どもを）外へ連れ出し、体を使って遊ぶことの楽しさを教えていかなければいけない昨今であるにもかかわらず、十分な時間が取れていないという現代社会である。そこで幼児体育への期待と意識が高まるとともに、幼稚園や保育所等における体育の果たす役割が重要になってきている。

幼児体育の基本的な考え方は、単に運動をさせるというものではない。保育においては、言葉の上では「運動遊び」であるが、「遊びの中に運動がある」という考え方から取り組んでいくことが重要である。ともすれば、子どもにとって遊ぶことが運動であり、遊びそのものが運動に取り組んでいる姿である。という見方、捉え方がある。

この考え方は共感できるものであるが、教育者としては意図的・計画的な「ねらい」があつてこそ教育という原則から、十分な教材の研究が必要となる。つまり、子どもは単に遊んでいるという状況のなかにあつても指導者（保育者）としては、活動のねらいを明確にするとともに意識化してのぞまなければならないと考えある。

(3) 幼児体育に係る研究の動向

幼児体育研究としては数多くの先行研究がなされており、その内容領域も多面的なものとなっている。そこで「体力・運動能力・技能に係る研究」と「幼児体育指導及び援助に係る研究」に分類することで動向をまとめた。

① 体力・運動能力・運動技能に係る研究

○ 体力について

体力については、一般的に「行動体力」と「防衛体力」に大別される。

体力の構造

体 力					
大きくは身体的要素及び精神的要素に区別される。体力という一般的な言葉を用いる場合は身体的要素を示す場合が多い。					
行 動 体 力	防 衛 体 力				
運動や労働等を効果的におこなうための能力。	病原体の侵襲や寒暑等のストレスから身を守るための抵抗力。				
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: center;">機能的要素</td> <td style="text-align: center;">形態的要素</td> </tr> <tr> <td>筋力、瞬発力 持久力、調整力 柔軟性</td> <td>体格、体系</td> </tr> </table>	機能的要素	形態的要素	筋力、瞬発力 持久力、調整力 柔軟性	体格、体系	ストレスの種類
機能的要素	形態的要素				
筋力、瞬発力 持久力、調整力 柔軟性	体格、体系				
	物理的ストレス、生理的ストレス 科学的ストレス、生物学的ストレス 精神的ストレス				

表：1

行動体力とは運動や労働等の動きをおこなうための基本的な能力のことである。その中にあつて、機能的要素とは幼稚園や学校において実施される体力診断テスト等での測定可能な能力を指している。さらに、形態的要素として身長や体重等があげられる。また、防衛体力については表：1に示すように、5つのストレスがあげられる。具体的には以下に

示すとおりである。

※ストレスの種類

- A：物理的ストレス（暑い、寒い、気圧に変化等の対外的な感覚による）
- B：生理的ストレス（食欲、睡眠、疲れ等の身体的不備による）
- C：科学的ストレス（酸欠や騒音等、人義的な物質変化や化合変化による）
- D：生物学的ストレス（ウィルス、病原菌、寄生虫等の媒体による）
- E：精神的ストレス（怒り、失望、苦悩、不快等の長期的体験による）

○ 運動能力について

運動能力については、筋力、瞬発力、持久力、平衡性、敏捷性、巧緻性、柔軟性などがあり、大きくは運動を遂行する上で必要な能力の総称であるとされている。

この項目内容については行動体力と重複する故、体力・運動能力と称する場合は形態を含む運動能力とされる。この能力を構造的にとらえた研究として村瀬智彦(7)は、日本体育学会において幼児の運動能力を因子分析法にてとらえている。ここでは、幼児の運動能力は「パワー、柔軟性、筋力、平衡性、持久力」から構成されていると定義している。

○ 運動技能について

運動技能は学習活動において獲得された身体的効果と称される。それは、以下のように基礎的運動技能と専門的運動技能に大別されているのが一般的である。

「基礎的運動技能」
身体活動をおこなう上で、その素地となる日常的な動き。 (例) 立つ・歩く・走る・跳ぶ・投げる・受ける・蹴る・拾う 他

「専門的運動技能」
伝統体育として受け継がれてきた運動であり、ルールや体系化等が明確なものとして示されている。 (例) ボール運動、格闘技、水泳 他

デビット・L・ガラヒュー(8)は、基礎的運動技能及び専門的運動技能をさらに詳細に分析することで、移動型、操作型、安定型とした。彼は子どもの運動発達の特徴について「幼少年期の体育：発達の視点からのアプローチ」において、人間の運動発達は、いくつかの段階に区分することができるとしている。

人間の運動発達における段階区分

- 第一段階（0歳～1歳）：胎児や新生児にみられる反射的な行動段階
- 第二段階（1歳～3歳）：はう、座る、立つ、よじ登る、歩く、つかむ、放つなどの随意運動が身につく初歩的な運動段階
- 第三段階（2歳～7歳）：二足歩行を身につけ、多くの行動を発見するとともに成熟と運動遊びの経験を通して多種多様な運動（動作）を身につける基礎的な運動段階
- 第四段階（7歳～ ）：基本的な運動技能を組み合わせることで、スポーツ等を楽しむことができる専門的な運動段階

ここでいう基礎的な運動段階とは、日常の動作や作業及び労働をおこなう場合の運動、意思や感情の伝達手段としての運動、健康・体力づくりの運動、体育やスポーツなど様々な領域での運動の基礎・基本となるものである。

この第三段階では、二つ或いはそれ以上の身体部位の運動を組み合わせることで、まとまった運動ができるようになる。従って、神経系の発達が目覚しい時期として一層の刺激が必要となる。

以上の段階を踏まえて「専門的な運動段階」に入っていく。つまり、人間の発育特性や運動発達特性からしても、幼児期から児童期にかけては身のこなしや巧みさ等、身体の発育・発達面において重要な時期であるということが出来るこの期を大切にしたいものであると考えられるが、現状を振り返ると、全国的に体力・運動能力面での低下傾向に歯止めがかけられていない昨今である。

② 幼児体育指導及び援助に係る研究

幼児体育指導法については野口隆史⁽⁹⁾がボール遊びをとおして動作、認識、習熟を分析内容として指導方法と内容についての研究を発表している。これは、屋外における転がしドッジボールを「①受け方 ②よけ方 ③投げ方（ねらい方）」という動きからとらえ検証するとともに、その指導方法として事前・事中・事後の声かけや援助の必要性を述べているものである。具体的には、事前アンケートにおいて、文字が読めないという前提の幼児たちに対して、選択肢は平仮名、絵図、そして身振り手振りを交えた動きとして説明すること。また、逃げる相手にみためたボールを右側から左側へ転がし、ねらうポイントを動くボールの前・直接・後ろの三点から予測させて動作化させることで認識を新たにさせる。というものである。村岡真澄⁽¹⁰⁾は「運動遊びにおける幼児遊び意識の発達と保育者の援助」の中で年齢毎の遊びに係る意識（2歳～5歳までに鬼遊び、1歳～5歳までにボール遊び）を明らかにするとともに、その指導・支援について述べている。（表：2参照）

遊びの階層と保育士のはたらきかけ

段階	遊びの意識段階	保育者の働きかけ
1	芽生えの時期	遊びを知るように
2	形成・充実期	遊びに慣れ、継続的にこなうように
3	発展期	意識を広げ、多様な楽しさに視点を広げるように

表：2

(4) 幼児体育の課題

幼児体育という分野における課題は多面的なものである。ここでは、近年における子どもの体力及び運動能力という着眼点からその課題に迫るものとする。

体力・運動能力を測る手段としては、文部科学省が実施・統計資料としている診断テストがある。これは、体力や運動能力の基礎・基本を把握するためには有効であり、傾向を探る上でも重要である。しかしながら、幼児期の子どもに対して、その内容と方法がどれほど浸透しているかは、不透明である。子どもの発達段階からすると測定方法の妥当性や評価の有効性を見直す必要があるものと思われる。また、判定結果による「できる・できない・上手・下手・得手・不得手」等など、幼児にとっての意識がどのように変容していくかが懸念される場所である。客観的な自己評価ができるようになるであろうと思われる時期に、最大能力を数値化することで運動離れ、運動嫌いの子どもたちが増えることがないよう、評価やあり方を一考すべきではないかと考える。

3. 学校体育

(1) 運動の意義

① 子どもにとっての運動の必要性

元来、人間は誕生時には何もすることができない。アドルフ・ポルトマン(11)によると「人間の誕生は、他の野生動物と比較すれば生理学的に早産という状態であり、未熟な状態で生まれてくるのである。」と述べている。動物学的には弱者の誕生として存在する人間であるが、高等な脳を生まれつき所有しているため、その後は自らの学習によって様々な変容が可能であると考えられている。つまり、動物界では高等な存在として立証される所以がそこにある。

さて、運動能力に視点をあてると、誕生後に自らの学習によってその力を獲得するという特徴的な点をもっている。そして、運動の習得は誕生から20歳頃までが上昇する。つまり、それを人間としての成熟期であると解釈されており、とりわけ、3歳という幼児期から10歳頃までの児童期にかけては人間としての動きの基礎・

基本を習得する時期にあるとされるのが一般的である。そこでは、自然な形（本能的）で運動としての技能を身につけていくのである。このことは、未知の外界への働きかけによる知的好奇心への刺激、さらには、仲間を求めていく云わば社会性の刺激によって、人間社会への適応性に係る基礎を培うことになるものと思われる。高田典衛⁽¹²⁾は、そこに、運動と成熟の関連性が生じてくるものであり、子どもにとっての運動は単に生理学的な現象に止まるものではない。と、述べている。さらに、同氏は、人間が人間らしく成熟するためには多様な運動要因があり、それらは発達段階（年齢毎）に応じて、以下に示すような動きの広がりや深まりがみられると述べている。

発達段階に応じた動きの広がりや深まり（高田典衛）

- 1 歳児 立つ 歩く
- 2 歳児 走る 高所に上がる
- 3 歳児 ぶら下がる 転がる 跳びあがる 跳び下りる 物を操作する
- 4 歳児 複合的な動き（音 物 人などの 対象を意識した動き）

以上を運動という視点から集約すると以下のような形態となり、動きの基礎・基本として身につけるべき内容となる。

動きの基礎・基本

- 1. 直立姿勢の運動 歩く 走る 跳ぶ 滑る
- 2. 変形姿勢の運動 這う 転がる 逆立ち
- 3. 高低移動の運動 上がる 降りる 揺する
- 4. 物を操作する運動 投げる 捕る まわす 押す 引く
- 5. 物に応じた運動 よける まわる 超える

つまり、これらの運動は生涯にわたって快適な生活を営む上で、必要最低限の動きとしてとらえることができる。従って、幼児体育から学校体育への系統性としては連続・発展させなければならない運動でもある。

② 運動の価値

子どもにとって遊びそのものが運動であり、遊ぶことによって体力的な面は十分に補うことができる。という考え方は昔から存在している。これは、特段の取り組みをおこなうことなく運動面における体力は発達段階に応じて自然に身につくものである。というものであり、特別な指導をおこなうことなく言葉を覚えるというのに類似しているようである。しかし、人間は誕生してから後の学習において獲得する内容が成長に多大な影響を促すということからすると、運動面においても意図的・

計画的な指導が必要になってくる。現在の学校教育における学習内容は、このような考え方から構成されている。

体育科においても、運動及びそれに関連性をもった内容で幼児期・児童期における望ましい成長を意図的・計画的に促進しようとするものである。しかしながら、体育科だけで全てのねらいが達成されるものではない。つまり、幼稚園や学校における教育活動がそうであるように、体育の場合も活動の内容と方法については、日常生活と運動の密接な関連を図りながら指導されなくては一層の効果は期待できないと思われる。従って、子どもの運動遊びを豊かにするためには遊びの生活指導を充実させることと、教材として精選された運動を関連付けさせながら仕組むことは、子ども一人ひとりの成長には必要不可欠のものであるといえよう。

子どものもつ多彩な能力を可能な限り開発し、人間としての全面的な伸長を期待する学校教育の目的からすれば、運動面での生活指導と教科体育としての学習指導をすり合わせるとともに、バランスよく活動させることは子どものよりよい成長を促すものであると考えられる。つまり、日常生活や学校生活の中に計画的な運動体験を仕組むことにより、健やかな成長をはぐくむ運動の価値が存在すると考えられる。

(2) 体育と遊び

① 遊びと子ども

遊びには意欲の高まりと同時に運動量の増加が保障されている。つまり、遊びは楽しむために自らが選択したものであり、それ自体が喜びであり楽しみである活動そのものである。ロジェ・カイヨワは、「遊びと人間」(13)において、その本質を○自由な活動○限定された時間、空間内の活動○不確定な活動○非生産的活動○ルールに基づいた活動○虚構的活動として、その領域を①競争 *agon*②運 *aiea*③模倣 *mimicry*④眩暈 *ilinx* と規定している。また、カイヨワは序論の中で、遊びは仕事の準備訓練ではないと述べている。

汽車ごっこをする少年は、何も実際に機関士になる訓練をしているのではなく、むしろ、その遊びを通して障害を克服することで、人生における困難に立ち向かことを育んでいる、と述べている。見方を変化させるとゲーム化された遊びは、勝とうという意欲を前提としている。というのは理解できないことはない。また、彼は、禁止行為を守りつつ(多くの場合はゲームのルールブック)、自己の持てる力を最大限に発揮しようとするところから、もっと大事なことは、礼儀において敵と交わり、思いがけない状況であっても自我を失うことなく立ち向かっていくことであると主張している。つまり、遊びによって人はこうした自己抑制の教訓に耳をかたむけるようになるというのである。ルールという制約を受けた中で、自己を抑えながら取り組むところに価値があるという意味であろうが、この序論は少し乱暴な論旨であるようにも感

じられる。しかしながら、子どもは多数の選択肢がある遊びの中から、自身の発達段階や成熟度によって自ら遊びを選択する。そこでは、価値判断をおこない決定するという自己判断力に委ねられるところが大きく、重ねて、緊張の緩和、筋力や心肺機能の強化、さらには、仲間との協同による社会性等々、子どもが成長する過程において有形・無形の財産が身につくというのである。

② 遊びと体育

上述のような子ども遊びを体育科学習に生かそうという試みは古くから存在している。

昭和初期には自発性をはぐくむべく、体操の遊戯化や模倣化に力点がおかれていた。その後、遊戯競技としてのドッジボールやリレーなどが重要教材とされていたが、これらは子どもの自発性高揚のための工夫教材として当時は絶賛されていたようである。また、これらの開発は体育科学習の教材開発を一層加速させたという。

戦後の体育科学習では、さらに拡大され、体育の学習時間は児童中心の遊び時間に変容するほどであった。その後、高度経済成長に伴い体力の低下が目立つようになり、体育の遊び化から体力づくりへと変わっていった。つまり、教材を与えて授業を仕組む伝統体育である。野球は上手にできるが、サッカーは巧みであるが、バスケットボールは、バレーボールは、というように結果を前面に出すことで、そのためのトレーニングに重きがおかれていたようである。しかしながら、そこには強制的な体力中心の学習の中から、子どもの自主性をはぐくむための楽しい体育は如何にあるべきかという葛藤が存在していたようである。

そこで、再度、遊びの導入による体育科学習が脚光を浴びるとともに、現在に至っている。遊びと体育とは、昔から子ども遊びとして生きてきた伝承遊びを体育科学習の中に教材として活用する方法と、伝統体育ともいえるべき器械運動やボール運動などを子ども自らが教材としてつくり変えることで遊び化することである。

ここに、遊びと体育のあり方、教材開発が重要になってくるのである。

(3) 学校体育の課題

文部科学省中教審答申⁽¹⁴⁾では体育科・保健体育科の現状と課題、改善の方向性(検討素案)として、次のようにまとめられている。

○現状のねらい

心と体を一体としてとらえ、動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、「積極的に運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てること。

○このねらいを実現するため

体育では、体づくり運動、器械運動、陸上競技（陸上運動）、水泳、球技（ボール運動）、武道（中学校・高等学校のみ）、ダンス（表現運動）及び体育に関する知識（中学校・高等学校のみ）等を主な内容としている。

○課題として

運動への関心や自ら運動する意欲、各種の運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら考えたり工夫したりする力、運動の技能や知識など、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分図られていない例も見られる。また、積極的に運動する子どもとそうでない子どもの二極化への指摘や、子どもの体力低下などが深刻な問題となっている。今後、自らの健康管理を自己責任のもとで行うことがいっそう求められることから、自らの健康を適切に管理し、改善する資質や能力の育成を充実するため、保健の内容や開始時期の検討が必要であるとの指摘されている。

学習指導要領においては指導者中心の教育活動から子ども主体の学習スタイルに変化してきているにもかかわらず、現場での様子はいかかなものか懸念される場所である。運動の主体である子どもの思いや願い、さらには、迷いや期待などについて、指導者が見えるような努力をしなければ大きな進展は望めないものと思われる。

3. 養成校における幼児体育

保育士、教員養成校としての幼児体育は、①幼児体育の理念②子どもの発育と運動③幼児体育の内容と指導法④幼児体育の理論と実践を系統的なカリキュラムのもとに学習展開がなされている。とくに、筆者の勤務する短期大学では一人でも多くの優秀な保育士、教員を育てるため、学科の工夫と独自性を探究しているところである。そこで、教育実習生として学んだ学生や保育現場で教育活動に励んでいる卒業生に様子を尋ねるとともに、幼児体育を探ってみると、次のような課題が存在している。

幼児体育指導者の職種を経営理念、経営目標に掲げた企業が数十年前から存在しており、体育指導者としての活躍の場は必ずしも明るいものではないという現実があるようである。また、園によっては従来の幼児教育における「体育遊び」に係る内容や方法は、小学校体育科カリキュラムを参考にしただけの指導であったり、外部における幼児体育指導者の実践経験を中心とした教育活動であったりと様々である。

養成校としては、未来を見つめる子どもたちを見守るべく明日を担う保育士や教員を志す学生には、自己の学びや研修によって幼児体育指導法を身につけることができるよう、そのあり方を提供しなければならないと思われる。

おわりに

子どもにとって、育ちの中に欠くことができない「運動遊び」は繰り返し活動やルールづくり、さらには気づき、理解等など多くの財産として定着している。そこにおける指導者（保育者）は単に見守るだけ、おこなわせるだけではなく、意図的・計画的な教育活動を展開していかなくてはならないはずである。つまり、子ども一人ひとりの発達段階や育ちにに応じた活動を投げかけるとともに、その助長に努めなくてはならないのである。

幼児教育は土の中に育つ根っこを育てることにある。という話を耳にしたことがある。従って、指導者（保育者）は見えないものを感じる感性を磨き、質の高い指導技術と理念をもつことができるよう、日々の研修に努めなくてはならないと考える。

引用・参考文献

- 1) 佐藤晴雄、2008「現代教育概論」第2次改定版 加藤文明社 pp207-p208
- 2) 塩田桃子、2007「日本における幼児体育研究の動向と課題」大阪健康福祉短期大学 第5号 pp61-p63
- 3) 鳥居鎮夫、1994「日本大百科全書、ニッポニカ」執筆：運動 小学館
- 4) 佐藤 裕、1994「日本大百科全書、ニッポニカ」執筆：体力 小学館
- 5) 富田玲子、1978「幼児体育研究の現状に関する一考察」清和女子短期大学紀要 7巻
- 6) 畠山トミ、1990「からだと遊び」学術図書 pp24-p27
- 7) 村瀬智彦、1990「幼児の運動能力評価法の研究」体育学研究35巻 pp207-p218
- 8) デビット・L・ガラヒュー：杉原隆監訳、1999「幼少年期の体育：発達視点からのアプローチ」大修館書店
- 9) 口野隆史、1998「幼児のボール遊び（ドッジボール）の指導に関する研究」
- 10) 村岡眞澄、1995「運動あそびにおける幼児の遊び意識の発達と保育者の援助（2）」日本保育学会大会発表論文 48巻 pp522-p523
- 11) アドルフ・ポルトマン、1961「人間はどこまで動物か」岩波新書
- 12) 高田典衛、1987「新体育科指導法辞典」明光堂院書局 pp21-p30
- 13) R・カイヨワ、1970「遊びと人間」
- 14) 文部科学省、中央教育審議会答申